

- (2) f, θ, χ → β, ð, γ 無声摩擦音→有声摩擦音
 (3) f, θ, x → b, d, g 無声摩擦音→有声閉鎖音
 (4) p, t, k → b, d, g or β, ð, γ 無声閉鎖音→有声閉鎖音または有声摩擦音

1. 無声摩擦音→有声摩擦音

(5) 松浪ほか (1983:156)

グリムの法則によれば印欧基語の無声閉鎖音 p, t, k はゲルマン語で無声摩擦音 f, θ, χ になったが、有声摩擦音 β, ð, γ になることがあった。(中略) そこで印欧基語において無声摩擦音の直前の母音に主なアクセントが置かれていない時には、ゲルマン語の無声摩擦音は有声摩擦音になったと考えられる。

(6) p, t, k → f, θ, χ → β, ð, γ
 └──────────┘ └──────────┘
 グリムの法則 ヴェルネルの法則

(7) 松浪ほか (1983:156 関連部分のみ)

(i) PIE p > Gmc β

Skt saptá, Goth sibun (b は[β]), OE seofon (=seven)

(ii) PIE t > Gmc ð

Skt pitā, Goth fadar (d は[ð]), OE fæder (WGmc で[ð] > [d]) (=father)

(iii) PIE k > Gmc γ

Skt śvaśrūs (2 番目の ś は k が口蓋化したもの), OE sweġer (=mother-in-law)

(8) O'Grady and Archibald (2000:305)

PIE	Sanskrit	Grimm's Law	Verner's Law	Gothic
*t	bhrātā	*t > θ	—	[bro:θar] 'brother'
*t	pitā	*t > θ	θ > ð	[faðar] 'father'

(9) Baugh and Cable (2002:22)

It was noted that between such a pair of words as Latin *centum* and English *hundred* the correspondence between the *c* and *h* was according to rule, but that between the *t* and *d* was not. The *d* in the English word should have been a voiceless fricative, that is a *þ*. In 1875 **Verner showed that when the Indo-European accent was not on the vowel immediately preceding, such voiceless fricatives became voiced in Germanic. In West Germanic the resulting ð became a d**, and the word hundred is therefore quite regular in its correspondence with *centum*.

(10) 宇賀治 (2000:12)

Rask も Grimm も上記第1段階の推移で、印欧祖語の p, t, k が s とともに、ゲルマン語派では常に期待どおりに f, þ, h, s へ推移するとは限らず、語中と語末で有声化して b, ð, g, z (古英語ではさらに変化して f [v], d, g, r となる) 場合があることに気づいていた。(中略) すなわち、ゲルマン祖語で問題の子音は、それに先行する母音にアクセントがあれば期待どおりに無声摩擦音(voiceless fricative [spirant]) へ推移するが、アクセントがなければ有声摩擦音が現れる。これをヴェルネルの法則(Verner's law)と呼ぶ。

(11) マルティネ (2003:95)

古いアクセントが語の第一音節に固定したアクセントに置き換えられる以前の段階で、*p, *t, *k, *k^wに起因する無声摩擦音[ϕ, θ, χ, χ^w]及びスー音*sは、これらが語頭にない場合でその直前にアクセントがない場合に、有声化してそれぞれ[β, δ, γ, γ^w]となった。したがって、これらのうち前の四者は*b, *d^h, *g^h, *g^{hw}の結果と合一した。この結果、*kmtóm「100」はまず[χunθám]となった。語頭の[χ-]は無声のままであったが、語中の[-θ-]はアクセントの直後ではなく直前にあったため有声化して[-δ-]となり、[-n-]に隣接していたため硬化して[-d-]となった。アクセントが第一音節に移ると語尾の[-am]は脱落した。語頭の[χ-]は普通[h-]となる。以上より hund が得られ、これはこのままの形で、あるいは合成語 hindred の一部として実証される。この一連の変化の定式化を行ったのはデンマーク人 Karl Verner であり、そのためこれはヴェルナーの法則の名で知られている。

(12) 中島 (1979:89)

以上の対応の中(1)の Gmc f, þ, h は s とともに、ときに有声摩擦音(b, d, g, z)になることがある。それはこれらの子音が語中であって、その語のアクセントがそれぞれの子音に先立つ音節にないときである。例えば L pater と OE fæder ('father')を比較すると p-f の対応はグリムの法則で説明がつくが、t-d の対応は t-þ という規則にそむく。しかしこれは IE 本来のアクセント法により Gmc 以前においてアクセントが、後の音節にきて *fabér であったため þ が有声化し、Gmc で *fader として現れ、これが OE fæder に発達したと説明される。このアクセントの位置による子音変化が Verner's Law と呼ばれるものである。

(13) 高津 (1954:64)

以上の推移の中で、ゲルマン語で IE の無声閉鎖音が無声の摩擦音となって現れるのは語頭及び共通基語のアクセントが直前の音節にあった時に限り、その外の場合、即ち共通基語のアクセントがその直後の音節或は一音節以上前にあった場合には、無声摩擦音は有声化している (例 Skt. pitár-, Gr. πατήρ : Goth. fadar と Skt. bhrātar-, Gr. φράτηρ : Goth. broþar-)。この条件をその発見者によって「Verner の法則」という。また鼻音の後では有声摩擦音は更にゲルマン語共通基語時代に既に有声閉鎖音 b, d, g, g^w となっていたものと思われる。【現代仮名遣い】

(14) 寺澤(1997:484-485)

◇OE fæder — brōþor 'BROTHER' の語間子音 /t/ — /ð/ の対応は Verner's Law により説明がつく。Grimm's Law によれば IE t は Gmc þ に対応するが、OE fæder と brōþor の場合は IE においてそれぞれ *patér-, *bhráter- のようにアクセントの位置が異なっており、前者のように直前の音節にアクセントを持たない場合は Gmc þ は有声化して ð (OE d) となり、逆に後者のように直前の音節にアクセントを持つ場合はこの有声化が阻止された (ただし þ は OE では有声音の間で有声化した)。Gmc ð は WGmc では d となる。OE fæder の fæ- は開音節であるため ME fāder となった。他方 ME の屈折形 fadres では fad- は閉音節であるため長音化せず、これの類推形 fāder も ME で用いられた。前者の ME fāder が規則的に発達すれば ModE 形は /féiðə/ となるはずだが、ME fāder が標準語形となった。また ModE /ð/ は ME から ModE への過渡期に r の前で /d/ が変化したもの(cf. GATHER, HITHER, MOTHER¹, TOGETHER, WEATHER, WHETHER: 逆の /ð/→/d/ の変化については cf. BURDEN¹, RUDDER)。

2. 無声摩擦音 → 有声閉鎖音

(15) 町田ほか (1997:228)

ベルネルの法則によると、印欧祖語の /p, t, k/ は、一旦グリムの法則の記述するとおりに /f, θ, h/ に変化した後、有声化する環境において /b, d, g/ に変化したが、アクセントのある母音の直後に位置する場合には有声化しなかった。例えば、印欧祖語の *pətēr は、ゴート語では fadar であって、語頭の /p/ はグリムの法則の通り /f/ になっているが、語中の /t/ は、直前の母音にアクセントがなく、母音間という有声化の環境にあるので、/θ/ ではなく /d/ で現れている。

(16) 小泉 (1984:234)

デンマークの言語学者 K.ベルネルは音韻法則におけるアクセントの移動に目をつけた。

(A)印欧基語 (B)前ゲルマン語 (C) (D)ゲルマン基語

(1) *bhrāter > *brá:θer > *bró:θar

(2) *pətér > *faθér > *fadér > *fáder

すなわち、印欧基語から前ゲルマン基語においては、グリムの法則通り(B)の段階で t → θ という摩擦化の変化が発生した。そして、(C)の段階で、(1)アクセントの後の θ はそのままであったが、(2)アクセントの前の θ > d に変化した、と考えた。

3. 無声閉鎖音 → 有声摩擦音

(17) 寺澤 (1997:1256)

Gmc では IE の -p- は Verner's Law で有声摩擦唇音の -b- に変わり、-t- は序数詞 Gmc *sebunða- (< IE *sepmtó- (子音重複のため最初の t を消失)) の影響で消失した。

(18) 田中ほか (1982:246)

これは不規則な変化であり、グリムは例外としたが、共通基語のアクセントの位置によって p, t, k は β, ð, γ として現れることがあるということを、ヴェルナーが証明した。これをヴェルナーの法則という。

(19) Miller (1996:10)

. . . Verner's Law, which said that **if the PIE voiceless stop is not initial, or is not immediately followed by a stressed vowel, then it becomes a voiced fricative in the Germanic languages.**

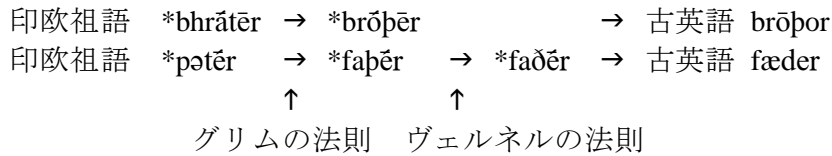
(20) ギルマイスター (2000:13)

古インド語	bhrātā	古英語	brōþor	印欧語	*bhrāter
古インド語	pitā	古英語	fæder	印欧語	*pətér
古インド語	satóm	古英語	hund	印欧語	*k'mtóm

閉鎖音 p, t, k は摩擦音 f, β, γ への途上で有声の異音 b, d, g (同様に摩擦音) を発達させたらしく、それらがつぎに印欧語 bh, dh, gh からの結果と一致した。したがって印欧語で第1アクセントが直前に来ない時には、ゲルマン祖語で f, β, γ の代わりに有声摩擦音 b, d, g が現れる。

(21) 吉田 (1996:113-114)

たとえば、古英語の brōþor 「兄弟」と fæder 「父」のあいだにみられる p と d の違いは、brōþor の場合はヴェルネルの法則がはたらいたときにアクセントは直前にあったが（対応するギリシア語の phrātēr を参照。印欧祖語のアクセントを書かれた記録のなかに残している代表的な言語は、ギリシア語とサンスクリット語である）、fæder の場合はアクセントが後ろにあったことによる（対応するギリシア語 patēr を参照）。



4. 無声閉鎖音 → 有声閉鎖音

(22) Crystal (1997:330)

Or again, the word for ‘father’ was *fadar* in Gothic and *pitā* in Sanskrit. The change from [p] to [f] was regular, but **why did the [t] become [d]**, when according to Grimm’s law it should have been [θ]?

(23) Crystal (1997:331)

He found that Grimm’s law worked well whenever the stress fell on the root syllable of the Sanskrit word; but when it fell on another syllable, the consonants behaved differently. A further change took place: **[p, t, k] did not stay as [f, θ, x], but became [b, d, g]**. The precise formulation of this regularity became known as ‘Verner’s law’.

(24) Bambas (1980:43)

Other parts of Verner’s Law settled a controversy involving apparent exceptions to Grimm’s Law, like the words *centum* > *hundred*; *hund* should be *hunth* according to Grimm’s Law, but, according to Verner’s stress-pattern theory, **t became d** when the IE stress did not precede the consonant in medial position.

(25) 小野 (1980:10)

印欧語の強勢が無声閉鎖音の後にあるとき（たとえば*pātēr）は、その無声閉鎖音はゲルマン語においては有声閉鎖音となる—*pātēr > *fadēr > *fāder。これを一般に ‘Verner’s law’ という。

(26) 桜庭 (1982:23)

すなわち IE p, t, k は上記の場合には f, th(b), h とはならないで、それぞれ b, d, g になるというのである。これが「ヴェルネルの法則」(Verner’s Law)と呼ばれるものである。

(27) 安井 (1996:850)

ヴェルネルの法則は、直前に強勢をもたないインドヨーロッパ祖語(PIE)の無声子音が、ゲルマン祖語(PGmc)では有声化する、という規則性をとらえたものである。一例をあげると、[PIE] *pātēr (*は推定形を示す) の語中の t が古期英語では fæder に見るように d に変化しているが、それは、直前に強勢をもたないインドヨーロッパ祖語の t が、ゲルマン諸語の1つの古期英語では、有声

化されたからである。

(28) Trask (2000:362)

Specifically, **PIE */p t k/, instead of developing as usual into Germanic /f θ x/, develop into voiced plosives /b d g/.** For example, the inherited /p t k/ of Greek *hypér* ‘over’, *patér* ‘father’ and *hekyrá* ‘mother-in-law’ are matched by /b d g/ in Old High German *ubar*, Old English *fæder*, and Old High German *swigur*.

(29) McMahon (1994:23)

The second problem is rather more complex: although Grimm’s Law predicts that PIE voiceless stops should become Germanic voiceless fricatives, they sometimes appear as Germanic voiced stops or voiced fricatives. PIE **bhrātēr-* ‘brother’ becomes Gothic *brōþar*, with medial *t > /θ/, but PIE **pātēr-* ‘father’ becomes **Gothic *fadar* with a medial voiced /d/.**

(30) Campbell (2001:91)

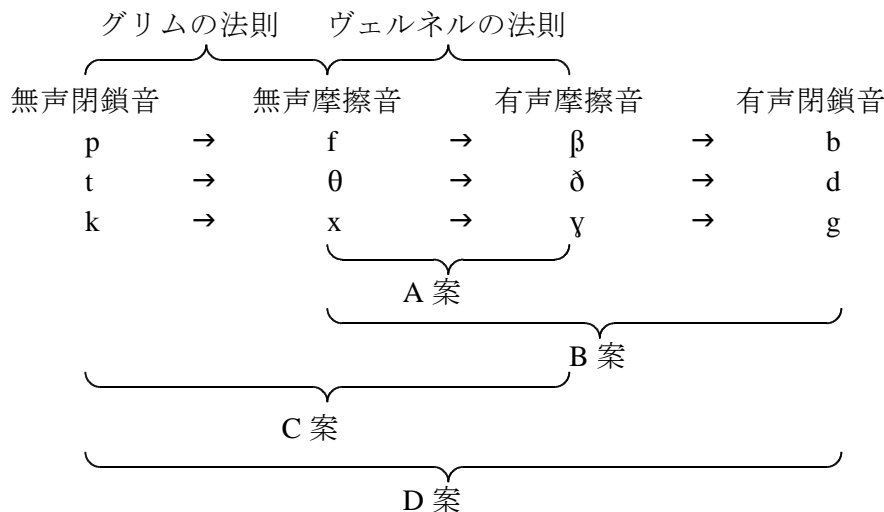
Proto-Indo-European	Sanskrit	Gothic	
*septém-	saptá	sibun	“seven”

Figure 4.3 Examples illustrating Verner’s law

By Grimm’s law, we expect the *p* of Sanskrit to correspond to *f* in Gothic, not the *b* found in this Gothic word, and given the *b* of Gothic, we would expect Sanskrit to have *bh*. Verner’s law explains this exception to Grimm’s law. When the Proto-Indo-European accent followed the sound in question (and it was not the first sound in the word), as seen in Sanskrit *saptá* (*á* is accented), ***p became b** in Germanic, as in the Gothic word; otherwise, Grimm’s law applied.

5. 検討結果と整理

(31)



(32) A 案 : Barber (2000:96)、Baugh and Cable (2002:22)、Bussmann (1996:513)、Fennell (2001:38)、藤井 (1992:180)、松浪ほか (1983:157)、McArthur (1992:1087)、Mitchell and Robinson (1999:42)、中島 (1979:89)、西光 (1997:103)、O’Grady and Archibald (2000:305)、小野・中尾 (1991)、Pyles and Algeo (1993:91)、宇賀治 (2000:12)、吉田 (1996:114, 2005:5)、神山 (2006:76)、マルティネ (2003:95)、中島 (1979)、寺澤 (1997:484-485)、高津 (1954:64)

- B 案： 小泉 (1984:234)、Fromkin and Rodman (1998:466)、町田ほか (1997:228)、
 C 案： 長谷川・脇山 (1998:7)、Miller (1996:10)、田中ほか (1982:246)、寺澤
 (1997:1256)、Campbell (2004:163)、ギルマイスター (2000:13)
 D 案： 荒木・安井 (1992:1559)、Bambas (1980:43)、小野 (1980:10)、桜庭 (1982:23)、
 Trask (2000:362)、安井 (1996:850)、Burgess (1992:133)、Campbell (2001:91)、Crystal
 (1997:331)

6. 注意すべき点

- (33) ゴート語では、母音に挟まれた b, d は[β], [ð]
 (34) 古英語では、þ, ð は母音に挟まれるか、母音と有声音に挟まれると [ð]
 OE broþor, broðor [ð]
 Gothic broþar [θ]
 (35) ゲルマン基語の摩擦音[ð] は、西ゲルマン語 (古英語) で有声閉鎖音[d]となる
 (36) 古英語では、8 世紀に[β] > [v]と変化した
 OE seofon [v]

Appendix

- (37) β, ð, γ : 藤井 (1992)、西光 (1997)、小野・中尾 (1991)
 (38) β, ð, γ : Pyles and Algeo (1993)
 (39) β, ð, γ : Bammesberger (1992)、Bright (1982)
 (40) þ, ð, g : 田中 (編) (1988)
 (41) þ, ð, g : 中島 (1979)
 (42) þ, ð, γ : Brook (1958)
 (43) þ, ð, g : 宇賀治 (2000)
 (44) b, ð, g : 安藤 (2002)

- (45) PIE *pətér → PGmc *faθér → PGmc *faðér →
 グリムの法則 ヴェルネルの法則 強勢の移動
 PGmc *fáðer → WGmc *fáðer → OE fæðer →
 ↘ Goth fadar [-ð-]

ME fáðer → ModE father [-ð-]
 d > ð

- (46) PIE *septm̥ → PGmc *sefúm → PGmc *seβún →
 グリムの法則 ヴェルネルの法則 強勢の移動
 PGmc *séβun → OE seofon [-v-]
 ↘ Goth sibun [-β-]
 ME seven(e) → ModE seven

- (47) Robinson (1997:10)

Latin	Goth.	
septem	sibun	‘seven’
centum	hund	‘hundred’
dux	(OE heretoga)	‘duke’

. . . . There was indeed a difference between the phonetic environments of those *p*'s that had gone to *b* (originally actually *ǃ*, a [*v*] formed with the upper lip rather than the upper teeth) and those that had gone to *f*.

(48) Campbell (1991:516)

/b, d, g/: pronunciation depends on position in word; cf. *barn* /barn/. 'child', *sibun* /sivun/, 'seven', where /-v-/ is a bilabial [β]; *augō* /auγo:/, 'eye'; *dag* /dax/, 'day': *drigkan* /driŋkan/, 'to drink'.

(49) 安藤 (2002:32)

印欧祖語の *p*, *t*, *k* は、[ゲルマン語では] 有声音の間にあつて直前の音節にアクセントがあれば、規則通り *f*, *θ*, *h* になるが、直前の音節にアクセントがなければ、*b*, *ǃ*, *g* となる

<i>p</i> — <i>b</i> :	Skr	saptá	Goth	sibun 'seven'
<i>t</i> — <i>ǃ</i> :	L	pater	Gmc	*faǃēr 'father'
<i>k</i> — <i>g</i> :	Lith	sakýti	ON	segja 'to say'
<i>s</i> — <i>z</i> , <i>r</i> :	PIE	*dheusó	Goth	diuza / OE dēor 'animal'

(50) Burgess (1992:133)

Grimm's Law did not seem to give a totally satisfactory answer to many enquirers. For instance, why should the 't' in *pater* correspond to the 'th' in 'father', but the 't' in Latin *centum* correspond to the 'd' in 'hundred'? . . . **Indo-European 'k', 't', 'p' became 'h', 'th', 'f' respectively in Germanic if the original accent or stress was on the preceding syllable. But if the accent was originally on a different syllable, the sounds became voiced - 'g', 'd', 'b'.** Granted that Latin *centum* is pronounced with the accent on the second syllable - /ken'tum/ - then the correspondence of 't' with English 'd' in 'hundred' is quite regular.

(51) Campbell (2004:162)

Verner's Law affects medial consonants; when the Proto-Indo-European accent followed, **medial (plain) voiceless stops and fricatives in a root became voiced in Germanic**; otherwise (when the accent preceded the sound or when the sound was root-initial) Grimm's Law applied.

(52) Campbell (2004:163)

Grimm's Law	Verner's Law
˘ . . . C C . . . ˘
* <i>p</i> > <i>f</i>	* <i>p</i> > <i>b</i> [β]
(1a) OE hēafod 'head' Latin cāput [káput]	(1b) Gothic sibun [siβun] 'seven' Sanskrit saptá
* <i>t</i> > <i>θ</i>	* <i>t</i> > <i>d</i> [ǃ]
(2a) Gothic brōþar [brōθar] 'brother' Sanskrit bhrātar-	(2b) OE fæder 'father' Sanskrit pitár-
* <i>k</i> > <i>x</i>	* <i>t</i> > <i>g</i> [γ]
(3a) Gothic taíhun Greek déka	(3b) Gothic tigus 'decade' Greek dekás

(53) 大江 (1999:217)

また、サンスクリット語やギリシア語の語中の無声破裂音に対してゴート語で無声の摩擦音で対応する場合と有声音が現れる場合とがあるが、祖語において先行する母音にアクセントがある場合に無声の摩擦音が現れ、そこにアクセントがない場合には有声音が現れるという規則によって「例外」を説明できることがデンマークの K. ウェルナー (Karl Verner)によって発見された。

「Verner の法則」 (Karl Verner)

印 欧 祖 語	*bhrātēr	*pātēr
サンスクリット語	bhrātā	pitā
ギリシア語	phrātēr	patēr
ラテン語	frāter	pater
ゴート語	brōþar	fadar
英 語	brother	father
ドイツ語	Bruder	Vater

(54) ギルマイスター (2000:63)

古英語ではゲルマン祖語の摩擦音 δ は閉鎖音 d になり、摩擦音 b と g は有聲摩擦音のまま、f と g と書かれた。

(55) 神山 (2006:76)

第1次子音推移 (グリムの法則) によって得られた子音は、該当する子音に先行する音節が本来的に強勢を有していた場合を除き、有声音間で有声化する：
例) *kmtóm “100” > Gmc. *[χumθám] > *[χunθám] (鼻音の調音点が後続音に同化) > *[χunðám] (θの有声化) > *[χundám] (ðの硬化) > *hund (アクセント第1音節に固定、語尾音節の消失) > e.g. E. hundred (*hund + *red “number” (< *rə-to- <√*rē- “to count”))。

(56) Verner (1875)

IE k, t, p first shifted to h, þ, f in all environments; the voiceless fricatives thus originating, together with the voiceless fricative s inherited from Indo-European, then became voiced medially in voiced environments, but remained voiceless when they were the final sounds of accented syllables.

参考文献

- 荒木一雄、安井 稔（編）（1992）『現代英文法辞典』三省堂。
- Aronoff, Mark and Janie Rees-Miller (eds.) (2001) *The Handbook of Linguistics*. Blackwell.
- 安藤貞雄（2002）『英語史入門』開拓社。
- Bambas, Rudolph C. (1980) *The Origin and History of The English Language*. University of Oklahoma Press. (鈴木榮一、佐藤修二（編注）（1981）『英語の歴史』金星堂.)
- Bammesberger, Alfred (1992) "The Place of English in Germanic and Indo-European."
In Hogg(ed.)(1992).
- Barber, Charles (2000) *The English Language: A Historical Introduction*. Canto Edition.
Cambridge University Press.
- Baugh, Albert C. and Thomas Cable (2002) *A History of The English Language*. Fifth Edition.
Prentice Hall.
- Bright, William (ed.)(1992) *International Encyclopedia of Linguistics*. Volume 2.
Oxford University Press.
- Brook, G. L. (1958) *A History of the English Language*. André Deutch. (石橋幸太郎、中島邦男
（編注）（1973）『(英文) ブルック英語史』南雲堂.)
- Burgess, Anthony (1992) *A Mouthful of Air*. Vintage.
- Bussmann, Hadumod (1996) *Routledge Dictionary of Language and Linguistics*.
(Translated and edited by Gregory Trauth and Kerstin Kazzazi) Routledge.
- Campbell, George L. (1991) *Compendium of the World's Languages*. Volume 1. Routledge.
- Campbell, Lyle (2001) "The History of Linguistics" in Mark Aronoff and Janie Rees-Miller (2001).
- Campbell, Lyle (2004) *Historical Linguistics*. Second Edition. Edinburgh University Press.
- Cipollone, Nick, Steven Hartman Keiser and Shravan Vasishth (eds.)(1998) *Language Files*.
Seventh Edition. Ohio State University Press.
- Fennell, Barbara A. (2001) *A History of English: A Sociolinguistic Approach*.
Blackwell Textbooks in Linguistics 17. Blackwell Publishers.
- Fromkin, Victoria and Robert Rodman (1998) *An Introduction to Language*. Sixth Edition.
Harcourt Brace College Publishers.
- ギルマイスター、ハイナー（2000）『英語史の基礎知識』小野 茂（訳）、開文社出版。
- Hogg, Richard M. (1992) "Phonology and Morphology." In Hogg (ed.)(1992).
- Hogg, Richard M. (ed.)(1992) *The Cambridge History of the English Language*.
Volume I: The Beginnings to 1066. Cambridge University Press.
- 藤井健夫（編）（1992）『英語の世界—英語学とその関連領域—』昭和堂。
- 長谷川瑞穂、脇山 怜（編著）（1998）『英語総合研究—英語学への招待—改訂版』
研究社出版。
- 神山孝夫（2006）『印欧祖語の母音組織』大学教育出版。
- 亀井 孝、河野六郎、千野栄一（編著）（1998）『言語学大辞典セレクション ヨーロッパ
の言語』三省堂。
- 小泉 保（1984）『教養のための言語学コース』大修館書店。
- 高津春繁（1954）『印欧比較文法』岩波全書セレクション、岩波書店。
- 町田 健 他（編著）（1997）『言語学大問題集 163』大修館書店。
- 松浪 有、池上嘉彦、今井邦彦（編）（1983）『大修館英語学事典』大修館書店。
- Lehmann, Winfred P. (2007) *A Reader in Nineteenth Century Historical Indo-European Linguists*.
Online Edition. (<http://www.utexas.edu/cola/centers/lrc/books/readT.html>)
- マルティネ、アンドレ（2003）『「印欧人」のことば誌—比較言語学概説—』言語学翻訳
叢書第9巻、神山孝夫（訳）、ひつじ書房。
- McArthur, Tom (1992) *The Oxford Companion to the English Language*. Oxford University Press.
- McMahon, April M. S. (1994) *Understanding Language Change*. Cambridge University Press.
- Miller, George A. (1996) *The Science of Words*. Scientific American Library.

- Mitchell, Bruce and Fred C. Robinson (1999) *A Guide to Old English*. Fifth Edition. Blackwell.
- 中島文雄 (1979) 『英語発達史 改訂版』岩波全書 143. 岩波書店.
- 西光義弘 (編) (1997) 『日英語対照による英語学概論 教師用 (独習用) マニュアル』くろしお出版.
- 大江孝男 (1999) 『新訂 言語学』放送大学教材 3706. 放送大学教育振興会.
- O'Grady, William D. and John Archibald (1996) *Contemporary Linguistic Analysis*. Fourth Edition. Addison Wesley Longman.
- 小野 捷 (1980) 『英語史概説』成美堂.
- 小野 茂、中尾俊夫 (1991) 『英語史 I』英語学大系第 8 卷. 大修館書店.
- Pyles, Thomas and John Algeo (1993) *The Origins and Development of the English Language*. Fourth Edition. Harcourt Brace Javanovich College Publishers.
- Pullum, Geoffrey K. and William A. Ladusaw (1996) *Phonetic Symbol Guide*. Second Edition. The University Chicago Press.
- Robinson, Orrin W. (1997) *Old English and Its Closest Relatives: A Survey of the Earliest Germanic Languages*. Stanford University Press.
- 桜庭一郎 (1982) 『英語史概要』篠崎書林.
- Stevick, Robert D. (1992) *A Firstbook of Old English*. Kenkyusha
- 田中春美 (編) (1988) 『現代言語学辞典』成美堂.
- 田中春美ほか (1982) 『言語学演習』大修館書店.
- 田中春美ほか (1994) 『入門ことばの科学』大修館書店.
- 寺澤芳雄 (1997) 『英語語源辞典』研究社.
- Trask, R. L. (2000) *The Dictionary of Historical and Comparative Linguistics*. Edinburgh University Press.
- 宇賀治正朋 (2000) 『英語史』現代の英語学シリーズ 8. 開拓社.
- 安井 泉 (1992) 『音声学』現代の英語学シリーズ 2. 開拓社.
- 安井 稔 (編) (1996) 『コンサイス英文法辞典』三省堂.
- 湯川恭敏 (1996) 『言語学』ひつじ書房.
- 吉田和彦 (1996) 『言葉を復元する』三省堂.
- 吉田和彦 (2005) 『比較言語学の視点』大修館書店.

Seiji Ueno
ueno@hgu.jp
HGU Department of English and Cultures
4-1-40 Asahimachi, Toyohira-ku
Sapporo, Hokkaido
Japan
062-8605